

特集

未来への古典

巻頭インタビュー

的場昭弘 教授

経済学部 社会・経済思想史専攻
マルクス研究

インタビュー

村井まや子 教授

外国語学部 英語英文学科
イギリス文学、比較文学、おとぎ話

大島希巳江 教授

外国語学部 国際文化交流学科
異文化コミュニケーション、社会言語学、ユーモア学

川田順造 特別招聘教授

日本常民文化研究所
人類学

KANAGAWA UNIVERSITY
Magazine

PROUD BLUE

02

2015/07



CONTENTS

p.03-11

FEATURE

特集

未来への古典

p.03-05

マルクスの眼差しで、
現代の世界を読み解く。

的場昭弘 教授

経済学部 社会・経済思想史専攻
マルクス研究

p.06-07

私たちは今も、
おとぎ話を生きている。

村井まや子 教授

外国語学部 英語英文学科
イギリス文学、比較文学、おとぎ話

p.08-09

落語、世界を笑わせる。

大島希巳江 教授

外国語学部 国際文化交流学科
異文化コミュニケーション、社会言語学、
ユーモア学

p.10-11

ホモ・サピエンスに
「知恵」はあるのか——
〈人類学者からの警句〉

川田順造 特別招聘教授

日本常民文化研究所
人類学

p.12

LABS

研究所紹介 経済貿易研究所

p.13

A NEW HOPE

～注目の若手研究者～

山本翔太

博士後期課程3年 化学専攻
山口和夫研究室

p.14-15

ESSAY:SCIENCE INSIGHTS

「新しさ」を自分で測るということ

森和亮 名誉教授

理学部 化学科
磁気化学、機能性材料化学、錯体化学

S. M. Kumbhar, 30/1/17
Das Kapital.
Kritik der politischen Oekonomie.

von
Karl Marx.

PROUD BLUE SECOND ISSUE:

未来への古典

学問や芸能の役割を敢えてことばにするなら、
「未来をつくる」こと。

今は古典と呼ばれている学問や芸能も、
かつては未来を切り拓いた、最先端の“知”だった。

壮大な歴史の中で受け継がれてきた古典を紐解くことで、
新しい未来が見えてくる。
それは、人類の積み上げてきた叡智が、未来へと受け渡された証なのだ。

マルクスの研究から、資本主義のその先を見つめ、
人類学の視点から、人間を「文化を持った生物」として捉え直すこと。
グリムのおとぎ話がわたしたちの思考に
どんな影響を与えているかを読み取り、
かつて江戸を笑わせた落語で、世界を笑わせるとなにか起きるか…。

今号は、神奈川大学の「未来への古典」にご招待します。

FEATURE

マルクスの眼差しで、 現代の世界を読み解く。

私たちは、資本主義の時代を生きている。
その本質をはじめて徹底的に分析したのは、
19世紀を生き、20世紀に多大なる影響を与えた知の巨人、
思想家のカール・マルクス(1818 - 1883)だ。
的場昭弘はほぼ半世紀に及び、マルクスと向き合い続けてきた。

商品の価値の源

ピカソが描いた「アルジェの女たち バージョンO」、1億7,936万5,000ドル(約215億円)。ジャコメッティの彫刻「指さす人」、1億4,128万5,000ドル(およそ170億円)——。今年の5月11日に行なわれた、アメリカの美術品オークション大手クリスティーズでの落札価格だ。破格の値段はメディアで驚きをもって報じられ、報道によれば、これらは美術品の競売史上の最高額記録を塗り替えたという。

かたや、この社会にはさまざまな商品が存在し、同じ商品の価格が、時と場合に応じて変わることがある。たとえば、定価1,800円で買った本を古本屋に売りに行くと二束三文にしかならず、それが古本屋の書棚に並ぶと100円で売られていたりする。

価格は需要と供給のバランスで決まる。それが現代の常識だ。学校でもそう教わる。だが、価格はそれだけで決まるものではないとの場は指摘する。

「商品には、価格を支える本質的な“価値”があります。商品をつくるのにどれだけの労働が必要か。それが商品の価値を決めるとマルクスは考えました」

需給のバランスもたしかに価格に影響を与えるが、その根底には人間の営みとしての労働がある。「労働価値説」と呼ばれるこの考えは、マルクスの議論の出発点となっている。

資本主義とは何か

価格と価値——。似ているようで両者は異なる。的場は、「マルクスにとっつきにくさを感じるのは、普段何気なく暮らしていると見

的場昭弘 教授

経済学部
社会・経済思想史専攻
マルクス研究



的場がワインを飲み始めたのは30年以上前、フランス留学中のことだ。ドイツ南西部、マルクスの生家がある町トーリアは、ワインの産地でもあった。マルクスとエンゲルスは「革命」の色を表す赤ワインを好んだ。ここ数年は研究室にワインを常備し、研究者やメディア関係者、学生が集う「サロン」の場を提供する。「人と話す刺激を得られ、アイデアが浮かんでくことも多い」と的場は言う。



附属図書館収蔵の『資本論』全3巻。上から第1巻の初版(1867年)、第2巻の初版(1885年)、第3巻の初版(1894年)。いずれもドイツ語版。『資本論』は20世紀に入り、旧ソビエトのマルクス＝レーニン主義研究所による編集が施され、現在日本で流通する『資本論』の日本語訳もソビエトの版にもとづく。ソビエトの手が入る前の版は極めて貴重で、時代を生き抜いた威厳を静かに放つ。

過ごしがちなことを問題として扱うから」と前置きし、両者の関係を次のように述べる。

「マルクス晩年の1870年代、“限界効用”と呼ばれる経済理論が広まりました。商品の本質的な価値を問うのをやめ、買い手の主観的な満足(効用)を価値ととらえ、支払い額の単位あたりの効用が最大になるように、買い手は購買行動を決めているという理論です。それに従えば、ピカソの絵に大金を払うのは、その人がそれに見合う効用を感じているからということになります」

この学説は、価値が主観的なものであるとの主張から「主観価値学説」とも呼ばれる。価値とは何かという厄介な問題を脇に置き、シンプルな見解は広く受け入れられることになった。だがそれにより、資本主義の本質をつかみづらくなったとの場は批判する。

「資本主義とは、資本の絶えざる自己増殖のことです。資本を投下して利潤を上げ、それを再投資して利潤を拡大し資本を増やす。こ

の運動が資本主義の本質です。問題は、価値の背後に労働があることを切り捨てると、利潤が生まれる仕組みをうまく説明できないことです。安く買って高く売ればいいじゃないかと思うかもしれませんが、みながそれをやろうとすると、誰も商品をつくる人がいなくなって、経済活動は破綻します」

マルクスは、利潤のことを「剰余価値」と呼ぶ。この語が示すように、利潤とは労働から生まれた価値の一部だ。労働から生まれた価値は、本来なら労働者の取り分であるはずが、資本家が労働者にすべてを渡すことはない。一部を「ピンはね」し、残りを給料として労働者に支払う。その「ピンはね」した価値こそが利潤(剰余価値)だ。

資本主義の終わりの始まり

マルクスは『資本論』で、資本主義の徹底した分析を行った。労働と価値の関係や利潤が生まれるカラクリの解明のほか、資本主義が抱える本質的な矛盾も明らかにした。それこそがマルクスの真髓だ。

「その矛盾のひとつは、“利潤率の傾向的低落の法則”として知られます。“利潤率”とは、投下資本に対する上がりの利潤の割合のこと。資本主義は成長の果てに、読んで字のごとく利潤率が低落する傾向にあり、資本の増殖にブレーキがかかる宿命を負っています」と的場は語る。資本主義の成長は、資本主義自体の終わりへ向かう歩みに等しいというわけだ。

この法則がなぜ成り立つかを、限られた紙幅で噛み砕くのは難しい。だが、マルクスの指摘はすでに現実のものとなりつつある。日本銀行が長年推し進める「ゼロ金利政策」が

SIDE STORIES

学生よ、旅に出ろ。 世界を知ると、学生が変わる。



学生とともに出かけた海外視察先で撮った写真。「言葉が通じない緊張感からか、学生の気持ちが締まる」と的場。帰国後は、学生が研究室の蔵書にも興味を示すようになるという。

学生にも届いた！ マルクスへの深い愛情。



6~7年前の学生が描いたマルクスの似顔絵。的場の不在時、メッセージ代わりに残されていたという。それが消されずに今も来訪者を迎える。実物は写真右。よく似ている。

髭に似合う帽子を探して。 その真の目的は……



的場は昨年から髭を蓄えている。マルクス愛が高じて……というわけなのかどうか、真相は如何に。髭に似合う出で立ちを求めて帽子を集め始めた。ハンチングをかぶることも。

その象徴だ。金融資本の利子は、商品をつかって売る産業資本の利潤を源泉とする。金利すなわち利率をゼロに近づけなければならないのは、社会全体で見て利潤を上げづらくなっていることが背景にある。昨年来、エコノミストの水野和夫氏（日本大学教授）が著書の『資本主義の終焉と歴史の危機』（集英社新書）で主張し、注目を集める論調だ。

資本主義が終わりつつあるとして、その後どんな社会が訪れるのか。それは誰にもわかりようがない。共産主義に可能性を感じていたマルクスとて、未来を予見することは慎重に避けていた。「未来予測はその時代の制約を受けると、十分すぎるほど分かっていたからではないか」と的場はその理由を推測する。「これからどうするかは、現代を生きる人間が考えていかなければならない」と、的場は言葉を添える。

マルクスと歩んだ半世紀

の場のマルクスとの出会いは、ほぼ半世紀前の1967年、的場が中学3年生のころに遡る。「その年は『資本論』刊行からちょうど100年。それを記念して刊行された『資本論』の解説書を書店でたまたま手にしたのがマルクスとの付き合いの始まりです」と当時を懐かしそうに振り返る。

高校受験に失敗し、挫折を味わった的場にとって、マルクスの言葉が支えになった。

「受動的な苦しみも、人間的に言えば、人間のひとつの自己の享受の仕方だ」（『経済学・哲学草稿』）

そして、「マルクスを研究するために」大学に進学して今日に至る。

多感な10代半ばからマルクス一筋を続けているうち、「マルクスが母国語のように」なってきたと的場は言う。

「マルクスのもの見方は独特で難しいと言われますが、私からするとマルクスのもの見方が基本にあるので、別の見方ができることの方が不思議に思えます」とのこと。もちろん、マルクスを外から客観的に見るために、現代の社会情勢をはじめ、さまざまな分野の研究も怠らない。

「いずれはマルクスの伝記を書きたい」と語

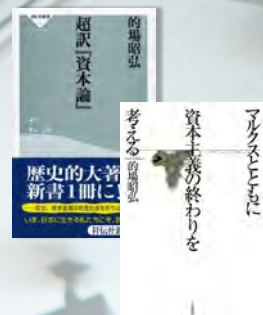
る場合は、意外な素顔について教えてくれた。マルクスは資本主義社会を批判するため定職に就かず、在野の研究者として困窮のさなか『資本論』を書き上げたと言われるが、それは旧ソビエト連邦がマルクスを美化するためにこしらえた作り話なのだという。

「マルクスも彼の妻も裕福な家庭で育ち、盟友エンゲルスも成功した資本家です。エンゲルスにお金の無心をする手紙が残っていますが、それは湯水のようにお金を使うから。マルクスが手にしていた収入は、ほとんど上流階級と言えるほどです」

マルクス一筋半世紀——。言葉にするのはたやすいが、何が的場の心をそれほどまでにとらえ続けるのか。

「マルクスは古典的教養豊かな博覧強記の人で、読み解くのは簡単なことではありませんが、いつ、どんなふうにも読んで知的刺激を得られます。それがマルクスの大きな魅力です。マルクスをどう解釈するかマルクス主義をどう活かすとか、それも大事なことです。私が解き明かしたいのは、マルクスの思想を産み出した彼自身の人物像です」

掘れども尽きない知の鉱脈。その偉大なる山と、的場は今日も対峙する。



的場はこれまで、30冊を超えるマルクス関連の著作を世に送り出した。『超訳『資本論』』全3巻（祥伝社新書・写真左は第1巻）は、2008年のリーマン・ショックを挟んで発刊され、累計10万部を超えるベストセラーに。近著に、『大学生に語る資本主義の200年』（祥伝社新書）や『マルクスとともに資本主義の終わりを考える』（亜紀書房・写真右）がある。

Akihiro Matoba

1952年、宮崎県生まれ。慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程満期退学。経済学博士。一橋大学社会科学古典資料センター一助手、東京造形大学助教授などを経て現在、神奈川大学経済学部教授。著作多数。近著に『大学生に語る資本主義200年』（祥伝社新書）がある。



3つの『赤ずきん』?

むかし、むかし、あるところに「赤ずきん」と呼ばれた女の子がいました。赤ずきんは森を抜けておばあさんの家へ向かいます。道中、赤ずきんは悪い狼に出会いました。悪い狼はおばあさんの家の場所を突き止め、先回りしておばあさんを食べてしまいました。そして悪い狼は、おばあさんに化けて赤ずきんを待ちぶせました。何も知らない赤ずきんは、おばあさんの家へと辿り着きます。そして悪い狼は赤ずきんに飛びかかり、赤ずきんを平らげてしまいました。——この『赤ずきん』はこのシーンで唐突に終わる。1697年にシャルル・ペローによって書かれたものだ。私たちの多くが知る、獵師が現れて赤ずきんとおばあさんを救出し、ハッピーエンドを迎えるのは19世紀のグリム童話のそれである。

また、「おばあさんの話」として知られるフランスの口承民話にも、赤ずきんは登場する。しかし、主人公の少女は赤ずきんを被っていないばかりか、自らの機知によって狼を出し抜き、無傷で逃げ帰ることに成功する。

「おとぎ話には、単一のオリジナル・ストーリーはありません。作家が自由に書き換えて良いという、不思議なルールを持った古典なのです」と村井まや子は話す。冒頭では3つの『赤ずきん』に触れたが、このどれもが「原典」ではないのである。

「おとぎ話は、時代の中で語り手と聞き手が変わるたびに書き換えられ、後世へ伝わります。ペローは17世紀末の宮廷人。結婚前の若い女性に向けて書かれた『赤ずきん』には、結婚前に悪い男の口車に乗せられるなどという若い女性への“警告”が見て取れます」

FEATURE

私たちは今も、おとぎ話を生きている。

聴き慣れた歌でも歌うように、誰でもいくつかのおとぎ話を、すぐに思い出すことができる。生まれて一番最初に触れた物語の記憶——それは、その人はもちろん、社会の在り方にすらも影響する。たとえば女性を女性らしくふるまわせるのは、おとぎ話だったりする。どれだけ深読みしても読みきれない、おとぎ話の深層へ、ようこそ。

村井まや子 教授

外国語学部
英語英文学科

イギリス文学・
比較文学・
おとぎ話

Mayako Murai

2001年、ロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジ大学院博士課程修了 (Ph.D. in Comparative Literature)。2004年より現職。



世界はおとぎ話でできている

村井は、おとぎ話の“Intertextuality”、すなわち特定のおとぎ話の構造やモチーフが、どのように文学、アート、映画などの現代文化の中に見いだせるかを考察し、批評するのが主な研究だ。国内外の作家やアーティストとも研究を通して親交がある。

「おとぎ話研究は、カオスの中に特定のストーリーや文脈のパターンを見つける面白さがあります。たとえば難解な現代美術や現代文学に触れた時、“何をどう理解すべきか”が分からなくなり、閉口します。ここで語り始める言語として、おとぎ話が使えらると、世界が違って見えてきます」と村井は話す。

子どもの頃から繰り返し触れてきたおとぎ話は、意識されないままに私たちの思考の血肉となり、考え方のパターンを規定する。その意味で人生というものは、おとぎ話の再生であり、再編であり、再構築の物語なのかもしれない。おとぎ話は私たちの無意識下に潜み、この世界の中に文学や絵画、映画となって溶け出している。村井はそれをすくい取り、再結晶化し、批評する。

「私には、この世界はおとぎ話が複雑に組み合わせられた結果として見えています。だから目の前で起こることに“あ、これは知っている”と思える。混沌とした現実の中に、自分の知っているパターンを見出すことで、考える手がかりを得られる。現状を客観的に分析し、陥りがちなパターンを脱するための方策を考えられるようにもなります」

おとぎ話がつくった、ジェンダーの今

村井はおとぎ話からジェンダーも考察する。

「伝統的なおとぎ話には、男性が女性を抑圧する価値観で書かれたものが数多く観察されます。つまりヒーローが何かを成し遂げる時、必ずと言っていいほど美女や子どもが現れ、ヒーローを支えることで、円満なエンディングを迎えるのです。ジェンダーの視点から見ると、非常に女性に対して抑圧的な権力構造の刷り込みと言えます。女性が主体的に何かを成し遂げるのではなく、ヒーローの無意識下に追いやられているのですから」

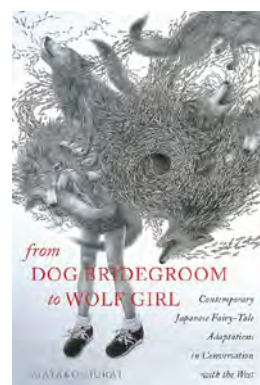
たとえば『白雪姫』は、ヒロインである白雪姫の自己実現というよりは、王子様が美女を見つけ、手に入れるという物語として読める。男性原理が強く働くおとぎ話が、グリム童話などでも多く採用された。これは現代の父性原理の社会の成り立ちと相似形を成しているとも見える。村井はこうした抑圧された女性像からの脱却、つまり「女性の脱神話化」を、おとぎ話から模索する論者でもある。

「おとぎ話は、大人にこそ読んでみてほしいと思うのです。おとぎ話の表層はとても単純で“透明”に見える文体で書かれています。子どもが体験できるのはこの部分だけです。大人になって、その深層を探れるようになると、普遍的な葛藤や矛盾などが次々と浮かび上がります。グリム童話は、みんなが知っているおとぎ話ですが、今読んでみると、そこには誰も知らない自分だけの人生の手がかりが見えてくるかもしれません」

社会が人間の意識の表象物だとすれば、その根底に、多くの人々が幼い頃に繰り返し触れたおとぎ話のコンテキストが見いだせることに何ら不思議はない。おとぎ話のIntertextualityは、文学や芸術作品だけではなく、この現実世界へと広がっているのだ。



大人が読むべきおとぎ話は、「まずはグリム童話だ」と村井は言う。写真は『The Original Folk and Fairy Tales of the Brothers Grimm』。



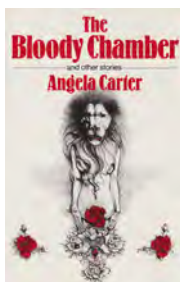
村井の新著『From Dog Bridegroom to Wolf Girl』の表紙絵は現代美術作家・鴻池朋子の作品。複雑で美しい構図の中に狼と少女が浮かび上がる。

SIDE STORIES



一冊のおとぎ話集が、研究の扉を開いた。

学生時代のゼミの教科書だった19世紀イギリスのおとぎ話集『Victorian Fairy Tales』でおとぎ話研究に目覚める。編者のジャック・ザイプスとは約15年後、学会で出会う。



最初の論文は、「女性の欲望」がテーマ。

研究者人生最初の論文では、アンジェラ・カーター著『The Bloody Chamber』を題材にした。女性の欲望を中心に描いた、常識を打ち破る画期的なおとぎ話集。



FEATURE

落語、世界を笑わせる。

「笑い」は人類の最も古い共通言語かもしれない。笑いは国境を超える。そしてユーモアは、人を繋ぐ。日本のユーモアの古典であり、今も新しく在り続ける落語。大島希巳江は「英語落語」でその可能性を世界へ広げる、噺家であり、「ユーモア学」の研究者だ。

大島希巳江教授

外国語学部
国際文化交流学科

異文化
コミュニケーション・
社会言語学・
ユーモア学

Kimie Oshima

2002年国際基督教大学大学院 教育学 (社会言語学) 博士。コミュニケーション全般、および英語教育における“笑いとユーモアの効果”を専門研究とする。1997年より英語落語の海外公演を行う。自身も高座へ上がり、古典・新作落語を演じる。2014年より、神奈川大学外国語学部国際文化交流学科教授。

“ユニバーサルユーモア”
としての落語

— 行き倒れた。

見慣れた小路に人だかりができていた。「く…熊じゃねえか!」。死体の前で声を上げるのは八五郎。熊こと熊五郎は八五郎の親友だ。「こりゃあ…あんたの知り合いかい?」。人だかりの中から町人が尋ねる。すぐさま八五郎「そうだよ! 熊はおれの兄弟みたいなもんだ!」と泣き崩れた。

「気の毒なことで…」町人が慰めの声をかける。しかし八五郎、「こんなになっちまって…熊はうち(長屋)にいる。きっと自分が死んだのも忘れて寝てやがるに違いない。すぐに連れて来てやるよ!」と言うなり立ち上がり、足が車輪にでも化けたかのごとくに土煙を上げて走り去る。

はて、ここにいるはずの死人を連れてくるとはこれ一体…。

今、日本の落語がアメリカ、イスラエル、シンガポールといった海外で好評を博している。世界を笑わせる寄席、「英語落語」だ。その高座に上がるのが大島希巳江教授である。

「ユーモアの定義は“常識からの逸脱”。落語に世界を笑わせる力があるのは“ユニバーサルユーモア”、つまり世界中の誰にでも理解し得る、普遍的で、人間としての本質をついたユーモアを持っているからです。落語の中で最も多いユニバーサルユーモアは“Stupidity”、つまり笑いを誘う“人の愚かさ”を題材とした小咄です。定番落語である冒頭の『粗忽長屋』では、目の前で死んでいるはずの親友を連れてくるために長屋へと走る慌て者(=粗忽者)の八五郎のばかばかしさに、どこかほ

っとして笑いがこみ上げてくる。こうした要素を抽出しながら小咄をセレクトし、翻訳と創作をすることによって、英語落語は生まれています」

落語の小咄の題材は男女問題や死別、商人との馬鹿話など普遍的なものばかりだ。古い言葉遣いに戸惑うことはあっても、現代を生きる私たちでもふと笑ってしまう。それは異文化の外国でも同じなのだという。

とはいえ世界からは「真面目」「ユーモアのセンスが無い」で通っている日本人が大昔に生み出したユーモアで世界を笑わせようとは、まるで落語のように滑稽な話だ。しかし「古いかこそ可能なこと」と大島は続ける。

「約400年前、日本に古典落語は2500程度存在したと言われていています。それが今は350程度にまで自然淘汰されています。現代にも普遍的に通用するユニバーサルユーモアを持っているものだけが、長い時間の中で生き残り、今の落語があるのです」

落語が国境を超えられるのは、時間を超えた「ユーモアの遺産」だったからなのだ。

ユーモアで変わる日本人

大島の英語落語は「笑顔の日本人のイメージを広げたい」という気持ちから始まった。「ユーモア研究で『笑いは敵をつくらず』というセオリーがあります。では、リアクションが薄く、ユーモアに欠ける“笑わない日本人”のイメージを持たれがちな私たちの印象はどうなるのか。この国際コミュニケーション上の日本人の状況を変えたいと思ったのです」。当時26歳だった大島は、日本のユーモアを研究する中で落語と出会う。関西の落語

家を集めて英語落語をつくり、世界を公演して回るうち、自らも高座へ上るようになった。今では公演の合間に、各国の小学校で「一席やらせてもらえないでしょうか?」といわば“ゲリラ寄席”も行っているという。

「世界の子どもたちに、『ある日突然学校に落語をしにやって来た面白い日本人』を記憶して、大人になってもらいたいです。大人になって社会に出て、政治家や企業人になった彼ら彼女らは、きっと日本人のことをユーモラスな国民だと思ってくれるはずなので」

英語落語は日本でも上演されている。外国人はもちろん、帰国子女、若者が多く訪れる。その多くが、後に一般的な落語の寄席にも通うという。つまり、英語落語が伝統落語と若者を繋ぐ架け橋になっているのだ。「うちには英語落語から流れてきた人もいるんだよ」と伝統的な落語界の師匠にも好評だ。

さらに大島は、企業のユーモアも変えようとしている。英語落語等で培った、「常識からの逸脱」を方法論化し、企業や組織向けのユーモア力向上を目指す企業研修として展開しているのだ。「日常の中で、怒りやストレスを感じるのは大きな損失です。それらはその人を蝕むだけです。その打開策が、ユーモアがもたらす柔軟性とクリエイティビティだと私は考えています。面白おかしく物事を受け止められると、イライラも笑いに変わる。どんなことでも笑い飛ばせるようになると、自分が楽しくなります」。研修には大企業の管理職や省庁の関係者などが参加している。

ユーモアの古典である落語を世界へ、社会へと伝える大島が作り出す笑顔には、古さに裏付けられた新しさがあった。

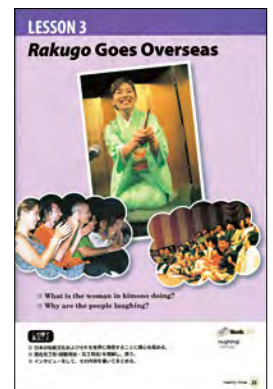
海外公演場所



アメリカ	パキスタン
ノルウェー	グアム
シンガポール	中国
マレーシア	トルコ
オーストラリア	ブルガリア
タイ	マカオ
フィリピン	ドイツ
インド	イスラエル
ブルネイ	ベルギー



英語落語はカリフォルニアロールだと話す。その心は「世界に広まるための邪道」。



多くの中学生が使う英語教科書『NEW CROWN 3』(三省堂)にも登場。タイトルは「Rakugo Goes Overseas」。来年度には改訂版も出版される予定だ。

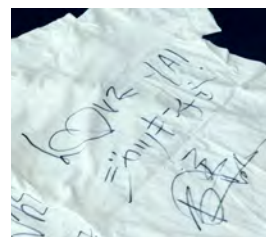
SIDE STORIES

そばの「ズルズル」に隠された昔からグルメな日本人の姿



落語の『時そば』では、そばをズルズルと音を立てて食べるシーンがあるが、なぜ日本人はこうした食べ方をするのか。これは、出汁とそばを空気と混ぜて食べることで、その香りを鼻で味わうためだという。こうした話も英語落語には盛り込まれ、知的好奇心をくすぐる。

「ジャッキーと話したい」ターニングポイントになったサイン



『五福星』の撮影に来ていた、大ファンであるジャッキー・チェンにももらったサイン。次にジャッキーに会う時にはきちんと英語が話したい、そう思って英語を身につけた。

何が人を人たらしめるのか

「人類学は、“すぐには役に立たない学問”です。けれども、だからこそ、長い目で見れば役に立つものだと思います」

川田は常々、自分が心血を注いできた人類学を、まるで禅問答のようにこう評する。いわく、何万年、何十万年のスケールで人類を見つめるこの学問は、「すぐに役立つ学問」のように、政治や経済の情勢に左右されることもなく、世界で起きている問題に対して長期的な見通しをつけられるということだ。

川田は、自身が実践してきた研究手法を「文化の三角測量」と呼ぶ。

「地測の場合は、三点から計測して位置を正確に定めます。人間の文化も自分の文化も含

めた、三つを研究することで、研究者の主観を相対化し、各文化の特徴をよりの確にとらえられると思います」と、その意義を語る。川田が研究対象に選んだのは、日本、フランス、アフリカだ。

人類を「文化を持った生物」ととらえ、生物種としてのヒトの文化の特徴を明らかにする——。それが川田の人類学の立場だ。そのために川田は「身体」に着目する。「身体」は文化を生む基盤でありながら、文化に大きく条件づけられている。そのことが、「文化の三角測量」ではっきりと見えてくる。

「たとえば“這い這い”は、日本では幼児の行いとしてごく普通に見られますが、ヨーロッパやアフリカではまず見られません。とくにフランスでは、幼児が四つん這いで歩くこ

川田順造 特別招聘教授

日本常民文化研究所

人類学



FEATURE

ホモ・サピエンスに「知恵」はあるのか—— 〈人類学者からの警句〉

人類は、生物学の学名で「知恵のある人」を意味する「ホモ・サピエンス」と呼ばれ、チンパンジーやゴリラ、オランウータンなどと同様、霊長類ヒト科に分類される。だが、80年に及ぶ人生の大半を人類学に費やしてきた川田順造は、現代の人類がその名に値するか、鋭く深く問いかける。

Junzo Kawada

1934年東京生まれ。東京大学教養学科文化人類学専攻卒業。パリ第5大学民族学博士。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授などを経て、現在、神奈川大学特別招聘教授・日本常民文化研究所客員研究員。著書・編著・訳書多数。近著に『〈運ぶヒト〉の人類学』（岩波新書、2014）などがある。

とを忌み嫌い、「赤子筒」と呼ぶ傘立てのようなものに入れておく習慣さえあります」

さらに川田は、排泄や性交、分娩といった、ほとんど道具を介しない行為や、笑い方や泣き方、歩き方や眠り方まで、あらゆる身体行為に、文化によって大きな違いが見られると指摘する。身体はけっして自分の意志だけで操作しているわけではない。人が半ば意識せずに従うこうした行動様式を「人を人たらしめるもの」ととらえ、その背後にあるものを探る。それが、人類学という学問だ。

文化を手にして失ったもの

川田は続けて、こうも言う。

「言葉を発することも身体技法そのものです。言葉ほど身体に密着したものはありません」

人類が言葉を発することができるのは、直立二足歩行と密接な関係がある。声帯が下がり、口腔の構音器官が発達したことで、音を操作し組み合わせ、言葉を話せるようになった。

言葉を獲得した人類は、やがて文字をも手に入れる。だが、文字は人類に普遍的なものではない。川田はアフリカのブルキナファソで、文字を持たないモシ族とともに暮らし、生活様式を調査してきた。

「彼らが文字を持たないのは、それを必要としなかったから。彼らはひとりひとり個性豊かな“自分語”を話し、文字教育で画一化されていない“アナーキーな声の輝き”を持っています。夜のお話しの座の録音を日本の友人に聞かせると、みな声の美しさに驚きます」

モシ族は、文字を持たないかわりに、物事を「しるす」別の方法を発達させた。それが太鼓の音で物語を綴る「太鼓言葉」だ。指先

の微妙な感覚で音を叩き分け、それによって言語を表現する。指先の触覚は脳の言語野と直結している。

「キーボードのブラインドタッチで文字を打つのも、点字を読むのも指先の感覚によっています。ヘレン・ケラーが指先の触覚で言葉を覚えたのも偶然ではないはずです」

言葉は紛れもなく、身体行為なのだ。

『世界は人間なしに始まったし、人間なしに終わるだろう』

これは、川田の恩師である故レヴィ＝ストロースが、1955年に発表した『悲しき熱帯』に書き残した一節だ。地球46億年の歴史のなかで、ホモ・サピエンスが誕生したのはわずか20万年前のこと。人類は後から地球にやってきた存在にすぎない。そのことを忘れてはならないと、静かに警告する。

時は、それからさらに半世紀を経た。

「ヒトはこの100年ほどの間に、20億人から70億人へと異常増殖し、ヒト同士で大量殺戮をくりかえし、日々多数の生物種を絶滅に追いやっています。地球を10回減ぼせる規模の核兵器を保有してさえいます」

これが「知恵」のある生物の行うことなのか。川田はそこに、人類の驕りを見る。ヒト以外の霊長類の行動には必ず自制が働くが、ヒトだけが自制と無縁のようだ。

「知恵を働かせて文化を生み出したことで、ヒトは自制を失ったのかもしれない」

現代は身体の希薄化が著しい。科学技術は高度になり、情報化が進展し、自分の身体を使わずとも生活を送れるようになった。身体を使って身の丈の暮らしを送り、自制を取り戻すこと。それが、いま人類に求められる本当の「知恵」なのだろう。



フィールドワークでアフリカに赴いたときのノート。メモとスケッチで、現地の人々の暮らしを克明に記録する。膨大なノートが緻密な研究の源。このノートは1976年ごろのもの。



『アフリカの音文化』 IV、V、VI

川田が1995年以来代表をつとめてきた海外科研報告書の最後の3冊は、神奈川大学で刊行。調査国の公用語で刊行し、成果の現地還元を実行してきた模範例。

SIDE STORIES



**旧モシ王国東部王朝で、
王宮付楽師長である祖父の、
王朝史を語る太鼓の打ち方を見習う豆楽師（川田撮影）**

川田は写真に親しみ、モノクロ写真は、ここに示した1968年撮影の写真も現像・焼付はすべて自分でした。踏み込んだショットで、現地の人々との信頼関係がなければ絶対に撮れない決定的な瞬間。



LABS

研究所紹介 経済貿易研究所

神奈川大学経済貿易研究所は、経済、貿易、経営、会計の各分野の調査研究の推進を目的に、神奈川大学で最初に生まれた研究所。物理学は“自然科学の王様”という呼び方にちなんで、その研究手法から“社会科学の女王”とも呼ばれる経済学には、国際学术交流がとくに重要である。

グローバルな学問、経済学。

同研究所は国際学术交流を重視した運営を行っていることが特徴だ。たとえば2008年には、ハンガリー出身で世界的に著名な経済学者であるコルナイ・ヤーノシュをはじめ、アメリカ、フランス、ドイツ、オランダ、中国、韓国から研究者を招いて「マルクスの遺産」をテーマにしたシンポジウムなどを開催している。

また、昨年からは経済学部との共催により、「フランス週間」というイベントも開催している。グローバル化と言え、とかく“アメリカ化”ばかりが志向されがちだが、「これからの国際化をフランスに学んでみよう」

という趣旨で構想されたイベントである。

同イベントは、昨年10月に「アンスティチュ・フランセ横浜」の協力を得て5日間に渡って行われた。現地の学者を招待して行われる、経済学だけにとどまらないフランスの社会・文化に関する様々な講演、フランス映画の上映会などから構成されており、研究者だけでなく、学部生や一般人からも人気を博し、成功を収めた。2015年も10月の開催が予定されており、来年以降も継続的な開催が期待される。

こうした国際学术交流の姿勢を育むための取り組みを通し、「グローバルな学問、経済学」を体現し、広めていくことが、同研究所の目指していることなのである。

1	2	3
4		5
		6

1. 資料が充実する研究所内は談話スペースとしても快適。
2. 「フランス週間2014」フランス語無料スピード体験の様子。
3. 英字新聞など、情報収集のための環境が充実している。
4. 所長の松村敏教授。
5. 海外雑誌が豊富。写真は経済学論文誌『エコノメトリカ』。
6. 研究所年報として『経済貿易研究』を、他に研究叢書として『経済貿易研究叢書』も刊行されている。



注目の若手研究者 山本翔太

博士後期課程3年
化学専攻
山口和夫研究室

ナノテクノロジー でつくる 薬の未来形。

「ナノマシン」すらも、すでにSFではない。これからは様々なナノテクノロジーが人間の身体に関わってゆく時代だ。そのひとつが医療だ。山本翔太は「光応答性ポリマーソーム」で薬の未来にイノベーションを起こそうとする。



光でコントロールする新しい投薬法

高分子で出来た「ナノカプセル」は、数ナノメートル～百ナノメートル（※）という極小のカプセル構造を持ち、内部に薬剤を閉じ込め、長時間保持することができます。このようなナノカプセルは「ドラッグデリバリーシステム（DDS）」の材料物質として注目されています。DDSとは、生体内の損傷部位に、薬物を必要量運搬し、必要な瞬間に作用させることのできる送達技術です。たとえば抗癌剤は副作用によって身体全体に様々な悪影響を与えますが、ナノカプセルを使ったDDSで抗癌剤を患部まで運び、薬剤を放出させれば、副作用の影響を最小限に抑えながら薬剤の効果を局所的に最大化することが期待できます。

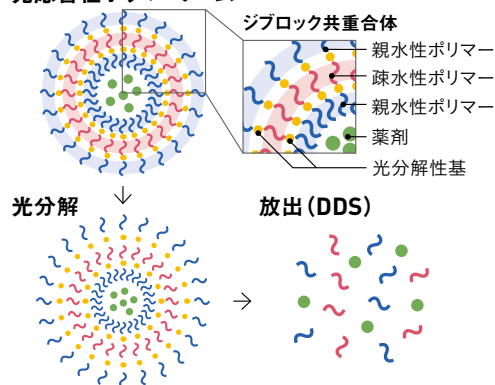
私は化学者として、このDDSの発展に貢献したいと考え、薬剤を放出するタイミングを光でコントロールできる仕組みを創案しました。ナノカプセルを構成する高分子に、特殊な光で切断される化合物を導入したのです。

それが、内部に水の層を持ち、光を照射することで中の液体を放出することのできるナノカプセル「光応答性ポリマーソーム」です。現在では様々な種類のポリマーソームを作り、光放出原理等を探究しており、化学的なアプローチでDDSへ向けた研究を行っています。

現在は所属している山口和夫研究室の他に、国立研究開発法人物質・材料研究機構で研究をしています。自分の手でがん細胞を使った研究を行い、本格的なバイオの世界に触れたことは、今の研究をより大きく後押ししてくれました。また、海外の研究者との交流も積極的に行い、様々な刺激を受けています。「研究者は想像と創造を大切にしろ」とよく言われます。自由に研究を想像し、実際に創造できる研究者になりたいと思います。

※1ナノメートル=100万分の1ミリ

光応答性ポリマーソーム



光応答性ポリマーソームは、親水性と疎水性を併せ持つ「ジブロック共重合体」によって形成される球体構造を持ち、光を照射して分解されることで、内部の薬剤を放出する。

Shota Yamamoto

1988年、静岡県出身。2011年、神奈川大学理学部化学科卒業。現在は学内だけでなく物質・材料研究機構（NIMS）国際ノーアークテクトニクス研究拠点（MANA）において、NIMS-MANAゲストリサーチャーとして研究を行っている。

2-3号特別連載

「新しさ」を自分で測るということ

膨大な量の気体を収蔵する不思議な金属錯体。水素社会に向けての気体貯蔵への実用化が期待されるこの研究は、森和亮による発見の後、多くの優秀な研究者によって発展し、世界で注目される分野にまで成長した。しかしきっかけは、偉大な閃きでも、理想的な実験環境でもなく、ほんの小さな事故だった——。科学が「新しさ」を生み出すために必要なことは、何なのか。不思議な金属錯体との出会いをめぐる、壮大な科学ドラマを連載で描く。



森和亮 名誉教授

理学部 化学科
磁気化学、
機能性材料化学、
錯体化学

Wasuke Mori

1968年、名古屋大学理学研究科化学専攻博士課程中退、大阪大学教養部助手、講師、助教授の後、1996年、神奈川大学理学部教授。同大学副学長、学校法人同大学常務理事を歴任。現在、同大学名誉教授。

「新しいこと」をつくる

「新しいこと」をつくるのは、科学の重要な役割のひとつです。では「新しいこと」が生まれるとき、必要なことは何でしょうか？

実験や測定の実験条件の良さ、でしょうか？

今の最新の実験設備の素晴らしさには目を見張るものがあります。でも、ふと自分の過去を振り返ったときに、条件が良すぎるのも、かえって「新しいこと」を生み出しにくいかもしれないと思うことがあります。

新しさをつくるためには、新しさを“測る”必要があります。当時はそのための測定器も自分で作らなければなりません。

私の専門は磁気化学、つまり磁性からアプローチする化学です。自作の測定器「磁気天秤」を使って、さまざまな原子間・分子間における磁性の相互作用を調べるのが、当時の私の研究者としての日常でした。しかしある時、事故が起きました。その事故を引き起こしたのが「テレフタル酸銅(II)」という金属錯体でした。

磁気天秤は、天秤と磁石からなる装置です。測定するサンプル(テレフタル酸銅(II))は「セル」と呼ばれる容器に入れます。その

上からガラス管でカバーをし、内部を真空にした上で熱伝導を良くするため、50分の1気圧程度の少量の窒素ガスを入れます。そして低温にすればするほど、弱い相互作用が計測しやすくなるため、外部からサンプルを77ケルビンの液体窒素で冷却します(図1)。

いつも通り測定を始めると、不思議なことに、すぐに天秤が大きく傾き、動かなくなっていました。つまり、サンプルが天秤の測定可能値よりも重くなり、目盛が振りきれってしまったのです。

中で何が起きているのか、外からは全く分からない構造のため、仕方なく外から冷却している液体窒素の容器(デュワー)を取り外しました。その瞬間、セルの中のサンプルが飛び出して、磁気天秤の中に飛び散ってしまったのです。私は一瞬、気が動転してしまいました。磁気天秤は非常に精密な測定器であるため、内部が汚れてしまうと、二度と使い物にならなくなる可能性があるからです。

私は大慌てで磁気天秤を分解し、中を丹念に掃除しました。そして再び組み上げてテストしてみると、無事、正常に動きました。なかなか優秀な天秤でした。

しかし私も懲りないもので、原因を究明す

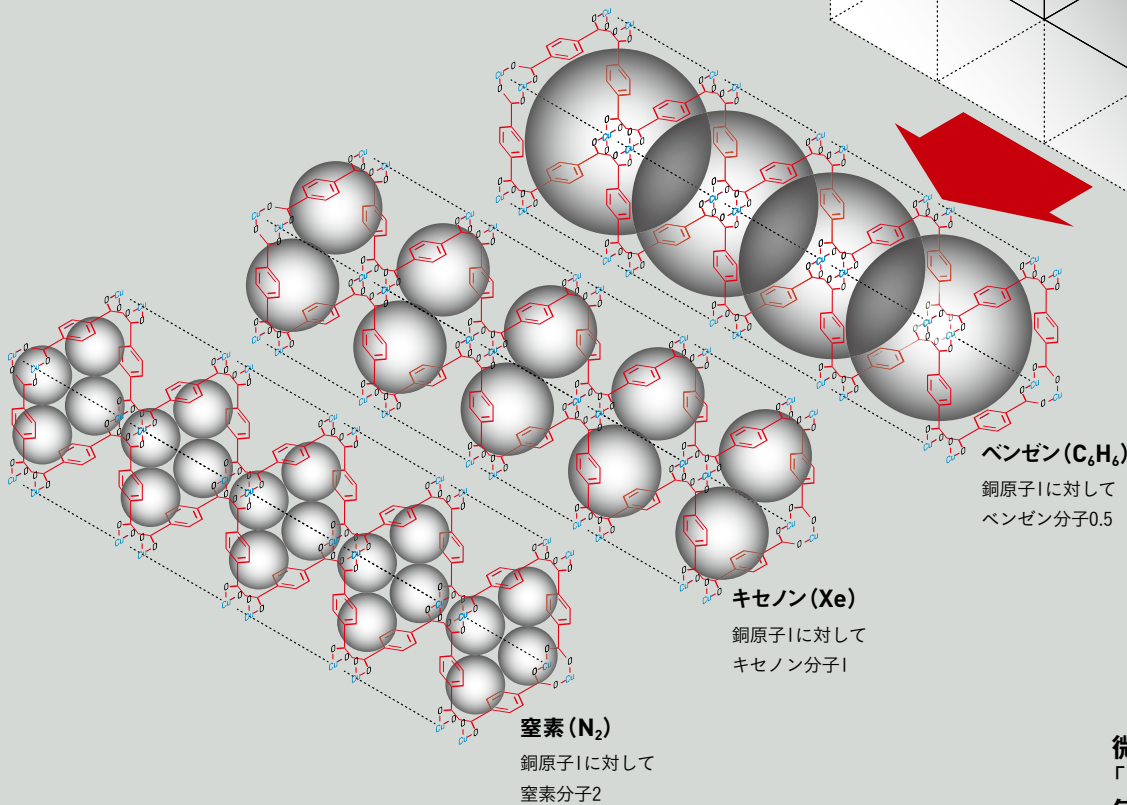


図2

テレフタル酸銅(II) 100g

無数の穴があいた「ナノ細孔」の構造を持っている

ベンゼン(C₆H₆)

銅原子1に対して
ベンゼン分子0.5

キセノン(Xe)

銅原子1に対して
キセノン分子1

窒素(N₂)

銅原子1に対して
窒素分子2

30e

の窒素と酸素を
収蔵出来る

るために、この事故を3回も繰り返したのです。結果は毎回同じでした。そして原因は相変わらず分からないのです。

研究室の先生ともう一人の研究者と数日間悩んだ結果「磁気天秤には少量の窒素ガスを入れている。この窒素ガスがサンプルに取り込まれたのではないか?」というアイデアが出ました。熱伝導を良くするために入れている窒素ガスが取り込まれたことでサンプルの質量が上昇し、磁気天秤を振りきったという大胆な仮説です。

さっそく確かめるために、磁気天秤内部を真空にして測定することにしました。すると天秤は正常に動き、測定できたのです。この実験により、重くなったのは、極低温下でテレフタル酸銅(II)に窒素ガスが取り込まれたせいだったと分かりました。

無数の穴が気体を収蔵する!?

もう好奇心は止まりません。テレフタル酸銅(II) 100グラムに対し、酸素や窒素が約30リットルも取り込まれることが、さらなる実験によって分かりました。

取り込まれるメカニズムを考えていくと、どうやらテレフタル酸銅(II)というものは、

無数の穴が空いている構造をしており、その穴の中に酸素や窒素が収蔵されていくことが明らかになってきました(図2)。

測定中にサンプルが飛び散ってしまったのは、デュワーを外したことでサンプルの入ったセル内部の温度が上昇し、低温状態では収蔵されていた窒素ガスが外に勢い良く飛び出たことが原因でした。

この不思議な現象について、私は1972年、日本化学会で発表しましたが、なかなか受け入れられませんでした。日の目を見るのは、それからさらに20年後、私が海外で発表した時のことです。長い時間を経て、私の見つけた不思議な金属錯体、テレフタル酸銅(II)は「新しいこと」になったのです。

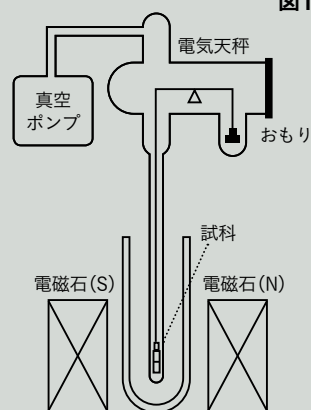
今の研究環境は、若い研究者にとって非常に良い環境です。しかし、あまり条件が良すぎると、実験の結果がどんどん得られるため、試行錯誤しなくなり、新しい可能性を見逃してしまうのです。

新しさというのは、時にそうした可能性や確率では測れないところからやってくる。科学者は、新しさを自分で測ることを、今こそもっと大切にしなければいけないのではないかと感じています。

微細で無数の穴「ナノ細孔」構造が気体を収蔵する!?

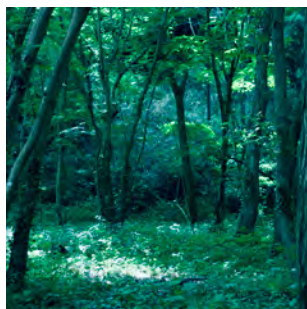
テレフタル酸銅(II)に空いている微細な穴に、ベンゼン(C₆H₆)、キセノン(Xe)、窒素(N₂)などの気体の分子が、どの程度の量で収蔵されるかをモデルで示した図。この収蔵能力を活かし、将来的には水素貯蔵の基礎技術などへ応用されることが期待されている。

図1



自作の高性能。「新しさ」を測る磁気天秤

天秤と磁石からなる装置であり、原子間・分子間の微細な磁性の相互作用を測定できる。強い磁場を発生する電磁石の間に、液体窒素で冷却されたサンプル(試料)の入ったセルを吊り下げて測定する。非常に高い精度を持っていたことから、当時は全国から学生が森の研究室を訪れた。



表紙について

古典的なおとぎ話における「森」は、何かのドラマが起こる異空間として登場します。今号の表紙では、湘南ひらつかキャンパスのとある場所の写真と、おとぎ話のイラストで、この森を再現。奥深い学問・芸能である古典の森の中へ皆さんを誘います。この写真の森が湘南ひらつかキャンパスのどこにあるのか、ぜひ探してみてください。

“今、そして行く末を照らし出す 古典の輝き”

古典は、時空、言語、文化を越え、今を生きている私達の只中に常に受肉化するとされています。21世紀は、急速な科学技術の進展と社会化によって、人類史上最も予測困難な時代とされています。このような時代にあつてこそ、古典は、今と行く末を照らし出す人類の希望の光です。PROUD BLUE第二号では、希望の光を求めて古典と格闘し、光を遮るパールを取り去ろうとされている研究者の思いと生き様を紹介します。

PROUD BLUE

編集発行/
神奈川大学研究支援部、広報部、学長室

CD/為房春香(図書印刷)
AD/細山田光宣(細山田デザイン)
D/グスクマ・クリスチャン(細山田デザイン)、
川口匠(細山田デザイン)
TEXT/森旭彦、萱原正嗣
PH/岡村隆広
PD/長濱紀子(図書印刷)

問い合わせ先
045-481-5661(代)
proud-blue@kanagawa-u.ac.jp